

学校と家庭の生活指導

子どもたちに基本的信頼感を育てる

活動と学びを追求しよう

瓜屋 讓

一 子ども、学校、保護者の状況

○ 子どもたちは、小中高どの発達段階かを問わず、経験不足から幼くなっている。自分の困った状況を説明することができない、いじめがエスカレートしてしまうなどは共通した課題である。一方、学校は、指導が通らない厳しさから子どもたちの言い分を聞くのではなく、「マニュアル化」と「学力」向上一色となり、教師同士も問題点の共有や議論ができなくなっている。

○ わたしたちは、貧困格差、孤立した子育てによって様々な葛藤を抱えている保護者、子どもが何を訴えているのかを探り、願いを受け止めていくことによって安心と信頼を取り戻

して行く筋道を明らかにしていく必要がある。また、それを可能にするための活動や学びを追求していきたい。

二 全道の実践の状況（レポートから）

1、「タロウの指導」

全釧路教組 暮津 友善

【状況】

タロウは、手をかけられないで育ったため、「人にこうしたらダメだよ」ということが理解できない。手加減できない。身辺自立ができていない。これらの問題はタロウのせいではない。母親も複雑な環境で育ってきて、自傷行為、授業の日々を送っている。放課後は、発達支援センター、デイサービス、ショートステイを利用している。

【質疑・討論から】

・ タロウは困っている。何とかしたいができないし、沸きあがってくる感情は抑えられない。障害は治すというより改善する、生活パターンにはめるのではなく、豊かにしていくという関わり方が必要。

・ タロウへの支援と周りの子の理解を広げる交わりの世界を作り出す、学級集団を育てる視点が必要。そのためにも、協

力学級担任との連携は欠かせないが、ここではその共同が取り組まれている。

- ・ 母親を孤立させない支援、母親が安心して依存できる関係（それがエンパワーメントにつながっていく）、レスパイトの利用も母親支援の一つの選択肢。

2、「集団づくり・つながりづくり」

(匿名希望)

【状況】

過去三年間、高学年の荒れの状態が続いている。三年前は、五年生が、二学期から落ち着きがなくなる。二年前は、六年生が一学期から廊下徘徊。二学期から学級崩壊、教頭への暴言、いじめ。それに対して、担任十三人の支援、保護者参観、学級通信で実態報告。個人面談。根底に、担任への不信任、担任も苦しむ。今年は、教師の話は聞ける、冷静な判断の出来る子がいるが、女子のグループ化、立ち歩き、ゴミの散乱、一人をいじめる。

【質疑・討論から】

- ・ 校内人事で、異動してきた教師に大変な学級を当てるのは問題の解決を遠ざける。
- ・ 貧困、母親ひとり親家庭が半数という実態を考えると、抑える指導ではなく思いを聞き取ることを大切にしていく。

- ・ 高学年が荒れていく……低学年から発達課題を意識した指導を丁寧積み重ねることが必要。

- ・ 達成感の持てる活動や学びが必要。

3、「スルーの先に見えてきたこと」

札幌市立あいの里東中学校 橋本尚典

【状況】

中三を飛び込みで担任。一年生から子どもたちとすれ違ってきたがそれに気がつかないまま、一部担任の入れ替えで対応してきた。学級は、教室に入れない子が出たり、若い女性の英語の授業は不成立に。

中心になっているのは男子のボスおよび女子を仕切る二人。意思決定はラインで決定、カーストが形成されている。

【質疑・討論から】

- ・ 最も指導の難しい男子ボスに話をしようとしたのは何故か
↓進路をめぐる家族との葛藤が接近のチャンス。カースト内の変化から可能性を感じ取った。
- ・ 学校の都合を優先した上からの指導では子どもたちに拒否される。否定的な言動を注意するのではなく、背景を探ることが大切であり、とことん寄り添う覚悟が必要。
- ・ スルーということは、何も指導しないのではない。子ども

とぶつかることを避けつつ、一から関係をつくっていくこと。いじめに関わる学び、班替えをめぐる議論、文化祭の取り組みなどの中で、どこでつながれるのかを多様に追求している。

・ 無用な力を入れない絶妙な距離感。

4、「鷹栖高校 今日も、のー天気」

北海道鷹栖高校 佐藤 理河

【状況】

旭川の志望校に入れない子どもたちが入学してくるため、地元の子どもたちは少数。一学年一クラス、四十人が入学して全員が一緒に卒業。生徒が自主的に活動して部活、生徒会活動、行事を進めている。その楽しい経験が、さらに意欲とアイデアを生み出してパワーアップしていく。

【質疑・討論から】

・ ここでは、担任の仕事は子どもたちの議論を保障し見守ること、という基本的なスタンスが貫かれている。これまでも高校からは、生徒の視線からの生徒会活動や学校づくり実践が報告されてきたが、まだまだ自治的な活動を追求する可能性が残されていることを示しているといえる。

・ また、子どもたちの中には、この「クラスはうるさくていや」という子がいたり、さらに虐待で父親が逮捕されるなどの困難を抱えたケースもあったというように、置かれている

状況は厳しい。それを乗り越えられたのは、様々な活動の中で互いにケアされたり、排除ではなく仲間の支え合いがあったからではないだろうか。

・ もう一つ、子どもたちとの信頼関係を支えたのは、「大きながぶ」という学級通信である。ここには、学習や行事、進路に関する情報が丁寧に紹介されている。改めて教育実践における学級通信の役割を捉え直してみたい。

このほか、「ひとりで悩まないで」（札幌「非行」と向き合う親たちの会 たにあきら）、「高校生の言動にみる青年期の葛藤と成長」（北海道教職員センター 石郷岡祥子）の二本のレポートが報告された。どちらも、月ごとの例会や教育相談にやってくる保護者、青年の声に耳を傾け、カミングアウトに至る葛藤と、生きづらい社会の中で抱えざるを得なかった苦しみに耳を傾けることがわかる。そして当事者は、聞き取られることで再生に向けて自ら一歩踏み出していく姿が浮かんでくる。